研究論文

韓国の樓亭に現れる景観処理技法に関する研究

安 啓 福*

A Study on the Landscape Treatment of Korean "LU" and "CHONG".

Gye-Bog AHN

摘要：本研究は、まず古文獻に表れている樓亭名を分析した。次に、現存している樓亭の立地類型別の景観構造、古建築の特徴、八景等を調査して、樓亭名の分析から導き出される結果を考証した。これによって、樓亭での景観処理は、聚景、多景、環景、遠景、挹景そして虚の概念で要約できることがわかった。

1. 研究の目的および背景

屋外空間を設計する際、利用者たちに満足感を与えるためにいろいろな接近方法が試行されている。しかし韓国の伝統的な空間概念を現代でも継続していくためには、韓国造景史全体に通じる設計哲学、計画原理、空間構成原理、景観導入技法等に関する数多くの研究が必要となる。

樓、亭に関する最初の記録は 西暦470, 480年ころから見る事ができる。以後、高麗時代(918~1392)には量的な増加と共に内容的(例えば、景観処理技法、立地類型を表わす樓亭名が見える)にも発展した。一方、朝鮮時代初期には樓亭の個所が、地域的にいってほぼ平均的な分布を示しつつ増えた。李朝中期になると、壬辰倭亂、丁卯胡亂等の影響で数が激減した。以後、李朝末期には、樓亭の数の増加の面からみれば、最盛期といえる。朝鮮時代に樓亭を造営した人々の社会的地位をみると、樓はそのほとんどを、地方の守令らが造営したのに対し、亭は、1900年代以前には多様な階層によって造営され、それ以後には、門中後孫たちによって多く造営された。樓亭を利用した目的からみると、樓は政治、行事、宴会をする公的な空間(public space)として発達し、亭は遊賞(遊観)を楽しむ私的な空間(private space)として発達した。¹⁾

樓亭様式は、このような多様な階層での多様な利用に供しつつ、長時間かけて発達してきた。この様式に表れている景観処理技法の特性が何かを明らかにすることが本論文の目的である。

本論文で使用する景観処理技法という用語は「ある景観を視覚対象物化して、空間を特性化させる方法」を意味する。朝鮮時代の徐居正をはじめとした多くの文人た

ちが、記文や詩を通じ、樓亭の景観の処理や空間的特徴などについて言及してきたが、これらをひとつのものに概念化させる必要がある。また、この概念は、借景のように単純に景観を借り入れることを意味するではなく、いろいろな概念をふくんだ景観処理方法を通じて、樓亭に登る人々に涼しい感じ(快)を与えようという意図をもつ概念である。世界の庭園の様式を比較したときに、一つの国の庭園様式が他の国のものと区別が可能ということは、景観処理技法に差異があるためである。

2. 研究方法

韓国の樓亭に導入された景観処理技法を明らかにするために、まず、古文獻に表れている樓亭名と記文を分析し、景観処理技法に対する概念を具体的に示した。次にこれを現地踏査によって論証する方法をとった。淳昌郡の觀政樓に関する李穡の記文²⁾に表われているように「記文は、樓名が持っている意味を明らかにする文章(樓之有記 尚矣作焉著其功名焉暢其義)」であるから記文をもとにして樓亭名を分析すれば、その当時において、樓亭がいかなる意味と特性を持つ空間であったかに関する核心的な概念を引き出すことが可能であろう。

(1) 分析する資料の選定

朝鮮時代の地理誌の中に、記文と詩文が多く載せられており、その意味を把握することが容易である。「新增東國輿地勝覽」²⁾と、立地の特性について、簡潔に記述されている場合が多い朝鮮時代後期の「大東地誌」³⁾「東國輿地備考」⁴⁾「増補文獻備考」⁵⁾を分析する資料として選定した。これらの資料中に登場する樓の数は486個所で、亭の数は505個所である。これらの資料中に樓亭名が途中で変更された25個所も含め、全部で、1016個

*暁星女子大学造景学科

の樓亭名がある。

(2) 現地踏査と分析方法

(i) 研究対象地選定

現地踏査の対象地の選定は、造営時期が比較的早く、原型がよく保存されており、様式上の特異性を持っていると予想されることを基準にした。立地類型別の景観構造、古建築的な特徴などを分析するために、全国を対象に55個所の樓と130個所の亭を踏査した。しかし、八景^{注1)}はすべての樓亭にあることではないので、八景分析対象地は樓1個所、亭36個所を選定したが、上記分析対象地と一部重複しており、本論文における分析対象地の総数は樓55個所、亭152個所となった。

(ii) 立地類型別の景観構造の分析

樓亭の立地特性別に表れる景観構造の特徴を分析するために、先ずSPSS/PC^{*}クラスター分析を実施して、立地特性を複合的に分類した。変数には、江(川、海)辺、池辺、丘上、山、林、岩、曲江、三江合流地、断岸上といった自然条件を選定した。また、自然条件より人文環境条件との関連性が高い、宮、城郭、家宅の3変数を追加し、全部で12個の変数とした。サンプルには、分析資料から現在においてはその当時の立地条件を判断することができない樓7個所を除外した樓48、亭130個所の資料を使用した。変数は加重値なし、1または0となり、squared Euclidean distance で完全結合方式(complete linkage)を使用して分析した。

空間構造(spatial structure)とは、空間のなかで内的、位置的にどういうふうに組織化されているか⁶⁾、あるいは、空間的配列やそれに関する位置⁷⁾を意味する。したがって、このような概念で樓亭と、それに関連する景観を分析することで、樓亭の位置(立地)によって、どのように景観が組織化(図-1、表-2)されるかを明確にしようとした。景観構造の分析のために、主に、1/25,000 地形図で眺望範囲と眺望することができる方向の数(眺望軸の数)、そして眺望軸線上の景観構成要素などを調べた。

(iii) 古建築的な特徴の分析

古建築調査項目は総計37項目を調査した。しかし、本論文では、「室」の有無だけを分析し、景観処理技法にある「虚」の概念との関連性を考察した。

(iv) 八景の分析

八景は、一般的に密陽郡の攪秀亭十二景のうち第三景にあたる「馬峯落照」のように表現されるが、「馬峯」は十二景対象地にある、江の向うがわの天馬山を指し、「落照」はその対象地でみられる景観を表している。したがって、本論文では、八景の対象地と景観をそれぞれ分析し、景観処理技法とどんな関係があるかを分析している。

3. 結果および考察

(1) 樓亭名に現れる景観処理技法

樓亭の名を選定する際の一般的傾向について、李穡(1352)²⁾は「自然景観に依って、大きく善を勸奨し惡を警戒すべき意味で、あるいは、先祖らが残してきた忘れるべきではない意味に基づいて定められる(寧海都護府の流沙亭の記…固有託之名山水 或褐大美大惡萬勸戒意或就其先代郷里以之不忘本…)」とした。また、東文選で申叔舟(1460)は、「嶺南は大小様々な村(邑)で官庁が約60個あり、それぞれの村に遊観する場所としての樓、榭、臺が必ずあるが、“見えているそのまま”の意味を取り、その名を付けた(…況乎嶺之南…爲邑者大小六十餘官 莫不有樓榭臺觀之所 而率以所見 取義名之…)」。

(i) 虚の概念

樓、亭の名に虚という字が入る個所はそれぞれ9個所と7個所で調査した樓亭のうち約15%、24%を示しており(表-1)、「虚」の概念が景観処理技法のなかで、基本になる概念の一つといえる。この概念については、孫舜孝の憑虚樓の記(1469)³⁾に「樓が空であれば様々な景観を巧みに引き込むことかできるし、心が空であれば上手に善なることを多く盛ることができる(樓虚則能納萬景 心虚則能容衆善)」と表現されている。李奎報(1251)¹⁰⁾も「作豁然虚敞者爲之亭」として、亭は豁(解放される空間)、虚(空である空間)、敞(涼しい感じを与える空間)などの空間的特性をもつところと定義している。樓亭はまず「虚」であるべきだ。したがって、もし樓と亭が虚でなければ、景観処理技法に出る聚景(景観を一つの点にあつめ)、多景(多くの景観をみえるようにする)、環景(景観を樓亭の四方に巡らすようにして)、挹景(景観を樓亭の中へ入ってくるようにする)の概念は生じないだろう。

樓亭が「虚」であるためには、立地条件が重要であり、また、建築物の構造も室または壁をなくし、もし分閤門があるならそれを使用して解放するべきであり¹⁰⁾、室根(のき)は飛びあがりそうな感じにする。こうした樓亭を眺めると、ちょうど「虚」の空間に建てられているかのようにみえるのである。

表-1 景観処理技法に関連される樓亭名

区 分	虚*	透*	聚	環	挹	計*
樓 個所	9	18	10	13	7	61
樓 %	14.7	29.5	16.4	21.3	11.5	100.0
亭 個所	7	4	8	0	4	29
亭 %	24.1	13.8	27.6	0.0	13.8	100.0

誤差限界(error bound): 0.05%

Z: 純粋にこの漢字だけが出現する個所数

Y: 樓亭の名の全体に対する比率は5~10%。

また、樓亭それ自体だけが「虚」であるのではなく、樓亭が立地する周辺にある水まで清く「虚」であるときのみ、万物をうけいれることができる。金駟孫の涵虚亭の記²⁾には「樓、城、峰、雲、樹木等が水中にさかさまに映らないことがない」として、水に関連される虚の概念を表現している。

(ii) 遠景

表-1によると、樓名に「遠」の文字が使用されている樓が18箇所あり、全体の約30%を占めており、このことから考え、「遠」は景観処理技法として、非常に重要な概念であることがわかる。遠字が用いられた樓亭名では、清遠樓3箇所、定遠樓3箇所、望遠樓2箇所、靖遠樓2箇所と廣遠樓、明遠樓、望遠亭、心遠亭、清遠亭、遠觀亭 各1箇所などがある。このなかには、涼しく開かれる景観を表わす樓名もあり、また、心理的效果に関する樓亭名も一部見える。このような概念は記文でも多数出現するが、たいてい遠いところをみるようにして、人々に広々としたのびやかな感じを与え、いきつまった思いや感情を相通じるようにして、遠慮するようにする(拱川縣の鶴鳴樓に関する徐居正の記、東萊縣の靖遠樓に関する申叔舟の記、陰竹縣の竹南樓に関する鄭以吾の記)などはその概念を表している。

また、遠景の概念は、寧海都護府の西樓に関する權近の記には、「遠いところがみられるので、まことに一村全体の良い景観をひとりじめできる」と書かれており、多景や聚景の概念と相通ずるものがあることを示している。

(iii) 聚景と多景

聚景技法は、聚遠樓4箇所、聚景樓2箇所、聚勝亭2箇所、衆美亭2箇所、聚勝樓、聚奎亭 各1箇所等の樓亭名に表れているように、遠いところにある景観を一つのところにあつめるという概念である。このような、概念に対しては次のように表現している。一つの村の勝景が全部、樓の一点にあつまったり^{註2)}或は江山の勝景が全部席に入ってきたり^{註3)}風景を寄せ集めたり^{註4)}遠くにある勝景などが簾と机の間に全部あつまってきたり^{註5)}或は一つの村の勝景を独占している^{註6)}といったふうに、多様に表現されている。

このほかにも、豊徳郡 觀湖亭 權滋の詩、公州牧 濁樂亭 南秀文の記、平壤府 大同門樓 觀近の記などでも似たような表現がされているが、ここに表れている共通の概念は、自然景観を樓亭一つのところにあつめるという、積極的な収斂方式といえる。

樓名に景が入っているのは、萬景樓5箇所、聚景樓2箇所、仙景樓、多景樓、齊景樓 各1箇所等で、これを一つの言葉にすると、多景である。つまり、聚景になるようにすれば、自然に多景になるとも言える。

(iv) 挹(納)景

次に、景観特徴や自然景観構成要素を樓亭の中に引き込む挹景技法がある。これは庭(Court)にいかなる人工的な作庭行為もおこなわずに、自然の勝景をそのまま樓亭のなかに引いてきたり(挹)、納めたりする(納)景観処理技法のことをいう。挹景と借景とを同一なものと判断しがちだが、その概念は異なる。この理由は借景は単に塀ごしにある自然景観を借り入れるのみなのに対して、挹景は外的には自然景観のなかの一点、すなわち樓や亭子に自然景観を集中するという積極的な収斂方式を取る。また、内的には樓亭に登る人々に収斂される景観を心理的に拡散させて与えるので、借景より挹景は深い意味をもっていると考ええる。

このように、自然景観を挹景すれば、集合体として現れてくる美が生じてきて、景観はおのずから豊富なものとなる。代表的な例が、平安道の定州牧にある納清亭で、多様な自然景観構成要素を亭のなかに引き込むという意味をもつ亭名である。納清亭の記に依れば、ひろびろとした川、波打つ音、佳い木、野花のかおり、明るい月、漁夫、ふね、木こりの子供、鹿、鶴、雲の一片、魚、霧、銀河水、あかつき、鶏、雁、夜明けの風などを全部、亭のなかに納められることである²⁾。

(v) 環景

環という字は、樓亭名に最も使用されることが少ない(表-1)。その概念は、環碧亭2箇所、環翠樓、環鏡樓、環瀛樓、環翠亭、環水亭、籠山亭 各1箇所等の名からもわかるように、縁、水、山等を樓亭に囲むように立地させることである。ところで、樓亭名に使用されることは少なかったが、多くの記で樓亭に登って景観をみれば清山が屏風のように囲んで(揖)いるように表現している。もし、人為的に圍繞空間を造成しようとする、規模や自然性に関して制約があり、かなり矮小化されてしまいうだろう。また、このように環景させることによって、前述した聚景と多景が可能になる(淳昌郡の歸來亭に関する徐居正の記)²⁾。

(2) 立地類型別の景観構造分析

樓亭で景観を眺める眺望軸を基準として、軸線上に特徴的なならぶ要素群を一般化させれば、図-1のように4段階の景観構造の特徴をもつ。まず、樓亭における景観構造上のAは、樓亭で眺望するとき、視覚の範囲を限

図-1 樓亭に関連される景観構造の一般的モデル

三江合流地という類型に含まれていて、丘の上あるいは断岸に立地する樓で現存しているのは永同郡の湖西樓と威陽郡の岳陽樓だけである。けれども、

表－2 樓の立地類型別の景観構造分析

立地類型	景 観 構 造*	個 所	A	B
江 辺 (丘, 岩)	青山→野・村→江・樓→邑→山	9	2.1	6.4
江辺断崖丘上	青山→野・村→江・断丘上樓→山	2	2.0	4.6
曲江断(丘, 岩)	青山→野→邑→沙・江・断丘上樓→山	5	2.8	10.1
三江 合流地	青山→野・村→沙・江・断丘上樓→山	2	3.0	9.7
丘 (岩)	青山→野→邑・川→丘上樓・山	4	1.3	5.4
家宅結合 (山)	山→野(村)→樓・宅・山	11	1.1	2.0

Z: 典型的あるいは一般的な例。

A: 平均眺望軸の数(個)→樓で他の景観を見ることができる眺望の数

B: 平均眺望距離 (Km)

「,」 親しているところ。

「.」 ついでいるところ。

「→」 そのような距離があるところ。

この立地は三江にそって広々とした空間が展開されるだけでなく、三江にそって眺望軸も広く展開する類型である。そのため、この類型も多様な景観処理技法が可能となる立地であるといえる。

いままで述べてきたような自然のなかに独立した型で建てられている樓ではなく、家宅の一部として家宅と結合した家宅結合型の樓は、本調査の対象となっている55個所のうち11個所であった。これらの景観構造は、平均眺望距離が2kmで、見える範囲が狭く、平均眺望軸数も1.1で、樓の立地タイプのなかではもっとも少ない。したがって、この類型は多様な景観処理よりは利用に焦点を置き立地している。立地特性として表れる景観構造上のC(樓・宅)および背景として表れるD(宅・山)は隣接している。

(ii) 亭の立地類型別の景観構造

江辺に立地する亭の一般的な景観構造は、遠く青山がみえて、その前に野と部落などが中景で広がり、近景では白沙場(砂浜)と水面、そして、江と隣接して亭があり、亭の背景には林や山があることが通例である。ここで、景観の主構成要素になる青山や野、村、沙等は、ほとんど八景の対象の場所となっている。その反面、江辺盤岩がよいところに立地した亭は、景観構造が多様で、一般化しにくい。

曲江辺と三江合流地に立地する亭は、他の立地の類型

図－4 曲江地点における立地条件

にくらべて、江にそっての平均眺望軸数が多くなり(図－4)、平均眺望距離も遠くなり、多様な景観処理が可能となる。特に、聞慶郡の鳳笙亭は、三江合流地の丘の上に立地する典型的な例である(図－5)。

村の周辺の丘、あるいは、村の後ろにある山に立地する亭は、ほとんど、門中の亭あるいは、個人の亭である。この類型の中の一部は、景観よりは利用に重点をおいたために、平均眺望軸数は1.2と低く、平均の眺望距離も4kmと長い方ではない。表－3に例として示した槐山郡の愛閑亭は、一般的な類型に属するが、眺望距離は0.8kmと短い。その反面、渾陽郡の松江亭、松園亭は愛閑亭と似通っている空間構造でありながら、眺望距離が7.5kmと長い。渾陽郡の歸來亭は、ひとつの邑を全部見下ろせる丘の上に築いた亭子で、眺望距離が6.1kmにもなる。林中、山中の溪辺、あるいは、池辺に立地する亭子は、図－3のような一般的な景観構造のモデルとしては発達していない類型であり、それほど多くはない。

(3) 古建築的な特徴の分析

樓と亭は平面形態のみならず、室の有無と位置によっても、明らかに差異がみられる。表－4、樓は81.1%が

表－3 亭の立地類型別の景観構造分析

立地類型	景 観 構 造	個 所	A	B
江 辺 (断崖)	青山→野・村→沙・江・亭・山(林)	21	1.3	4.1
江 辺 盤 岩	青山→溪・盤岩・亭・翠壁・山 (鶴泉亭) 山→野・村→川・岩上亭・川→山 (昭然亭) 赤壁・川・亭・村 (招濟亭)	20	1.4	3.5
曲 江 辺 (断 丘, 岩)	青山→野・村→沙・江・亭(宅)・山 (三平亭) 青山→野・村→沙・江・断丘上亭・林(一般)	11	2.1	7.3
三江 合流地 (岩, 断丘岩)	青山→谷(江・野・路)→江・断丘上亭・林(鳳笙亭) 青山→沙・江→沙・江・岸上亭・山 (台江亭)	7	2.8	8.8
丘 (園)	山→川→村・亭・山 (愛閑亭)	19	1.2	4.1
池 (岩)	造成: (山)→林・池亭・宅・山 利用: 青山→野→池・亭・林→山	4 5	0-1 1.6	0.8 4.7
家 宅 結 合 (池)	山→野→江→亭・宅→山 (鶴樵亭) 宅→室・池・盤岩上亭・池・林 (寶岩亭)	11 3	1.0 0-1	2.0 0.2
林 (丘, 池)	林→亭・林	8	0-1	0.5
山溪(家)	山→溪・亭→山	3	1	2.1

A: 平均眺望軸の数(個)

B: 平均眺望距離 (Km)

図－5 三江合流地における立地条件
(慶北聞慶郡の鳳笙亭)

表-4 樓亭内の室の位置および有無分析

區 分		樓 閣		亭 子	
無 室		45 (81.8)		65 (50.0)	
有 室	兩 ^Z	3 (5.5)	10 (18.2)	24 (18.5)	65 (50.0)
	兩, 偏 ^Y	0 (0.0)		4 (3.1)	
	偏 ^X	3 (5.5)		15 (11.5)	
	中 ^W	1 (1.8)		22 (16.9)	
	其 他	3 (5.5)		0 (0.0)	
總 計 (%)		55 (100.0)		130 (100.0)	

Z: 室がマル(床)を中心に両側に分離されている。

Y: 兩分されたが、一方に偏重。

X: 一方に偏在。

W: 中に位置。

無室形であるのに対し、亭は室がある場合とない場合が半々に分かれている。亭に室がある場合には両側に分離された類型と中央に位置した類型が70%程度になる。しかし、樓は大部分が室をもたないために空間自体が亭よりも虚である。樓に室がある場合は、安東の七星樓、奉化の明月樓、盈徳の花樹樓、求禮の雲鳥樓のような家宅結合型である。安東の清遠樓、鎮安の睡仙樓のような特異な場合を除外すれば、亭のようにオンドルがある場合はほとんどない。

室がないというのは、室を作っている壁がないということと同じ意味で、建物に壁がないことによって、建物自体はさらに“虚”になる。したがって、樓亭の建築物は外部の景観を樓亭の中に引きこんでくるので、景観処理技法上では挹景が可能な建物構造を持つ様式といえることがわかる。また、樓が亭子よりも室がない場合が多いことと、樓亭名分析の際に、景観処理技法に関連する字が樓により多かったことは一致する事実であった。

(4) 八景の分析

(i) 八景対象地の分析

37個所の樓亭に設定された345個所の八景対象地は自然環境が76.8%、人文環境が21.4%占め、このことから主として、自然環境を八景対象地に指定したことがわかる。自然環境中での八景対象地は地形が174個所、50.4%で半分を占めており、続いて水が80個所、23.1%で約1/4を占めている(表-5)。

地形の中では眺望する時、主景観構成要素になる、山(52)、峰(26)、野・坪・郊(16)らが八景対象地になる。これは、表-2、3の立地類型別の景観構造分析では、視覚的限界を示す要素と、眺望する時に広いという印象や、涼しいという印象を与える要素である。これらは、樓亭へ登った時に人々の閉鎖的で苦しい感情や思いを開放的にする^(註7)といった心理的な効果をもつ景観処理技法である。このような要素が50%程度になるということは、非常に重要な評価すべき対象と考えるられる。

岩(26)は、亭子において直接見えないところに位置するのが多く、石の形が特異な形態をあらわす石門、危

表-5 亭に選定された八景対象地における環境区分による分析

区 分	八 景 対 象 地
自然環境	地形 山(52 ^Z)、峯(26)、野(16)、臺(14)、沙(10)、 174(50.4) 峴(10)、坡(5)、堤(4)、岸(4)、壁(3)、島(2)、谷(2)
	水 江・川・溪(42)、湖・潭(12)、浦・津(11)、渚(3)、 80(23.1) 瀑(2)、瀆(1) / 池・塘(7) / 海(1)、水櫃(1)。
	木 松(4)、林(2)、桃(1)、杏(1)、柿(1)、楓(1)、碧梧 11(3.2) (1)。
人文環境	村(29)、寺・庵(12)、樓・亭(9)、軒(4)、庭・園(6)、 74(21.4) 橋・亭(4)、城(4)、壇(2)、路(2)、井(1)、江市(1)。
その他	5(1.7) 蹴球場(1)、流觴館(1)、帆(1)、鴻(1)、鷗(1)、琴(1)

Z: 出現箇所。

酔岩、釣岩のように場所的な意味をあらわすものが、八景対象地になっている。臺(14)は、ほとんど、村辺や川辺に立地する亭子で直接は見えないが、川辺にある盤石型の大きい石を示し、臺の下には清く、青い水があり、魚のあそぶ姿が見られるために、観魚臺、観魚磯、鳶魚臺等の名称をつけて、その対象地にしているし、また、月の出、あるいは、江に沈む月の姿をみる月臺、あるいは、釣臺、酌臺、観瀾臺などの名称をつけて、八景対象地にしている。

沙(10)は、江辺に立地する亭子ではよく表現される眺望要素で八景対象となり、これ以外に、量的には多くはないが、坡、堤、岸、環碧、蒼碧、島などの地形的要素も八景のひとつの対象地になっている。

江・川・溪(42)は、それ自体が持っている、あし(葦)、水石、瀑、逆水などの自然の現象的な特徴と、落照、月などのように自然が演出する瞬間的景観や、水音、魚笛、魚歌のような聴覚的特徴などに加え、観魚、観瀾、洗心などのような行動をおこさせるだけでなく、濯纓のような意味をももちあわせているために、亭ごとに1~2個所以上は水を八景対象地にしている。

人文環境の中で最も多いのが村(町)29個所である。村については、亭の前景に広がる野原の中に点在している村が対象地となっている。これはやはり、立地類型別の景観構造分析で主景観構成要素になっていたものである。寺12個所と城4個所は亭では直接みえないところであるが、寺は寺刹の曉鐘や暮鐘といった聴覚的なものを含めて八景となっており、城は、その山の自然現象とか、晩春、樵歌なども含めて八景となっていて、直接見られないものや直接きけないものも八景として設定している。

自然環境の地形と水の分類項目の中で、峴、谷、岩、臺、浦、瀑などの八景対象地と、人工物の寺、城、橋などの対象地は亭で直接にはみえないところが大部分である。このような所を八景対象地に選定するのは、こういった対象地の景観が亭の景観になることによって、見えない景観までも樓亭の中へ引き込むという挹(納)景の技法を用いているからと思われる。

表－6 八景対象地に選定された景観素材および関連景観分析

対象地	八景	対象地	景観素材
自然現象 131 (43.1)	秋月*(26*), 落照(22), 群雲*(13), 疏雨(10), 清風(9), 朝旭(7), 晴雪(7), 晴嵐(6), 活水(5), 飛瀑(5), 晚春(3), 清陰(3), 秋影(2), 朝露(2), 宿露(1), 宵漢(1), 層氷(1), 危岩(1), 層岩(1), 峭壁(1), 名沙(1), 水石(1), 白波(1), 野色(1), 瑞色(1)		
植 物 47(15.5)	青松(10), 春花(7), 蓮(6), 稚竹(4), 丹楓(4), 古槐(3), 碧梧(3), 黃稻(3), 黃麥(1), 綠柳(2), 栢(1), 種菰(1), 芳草(1), 栗林(1), 秋葉(1)		
音 38(12.5)	牧笛(15), 曉鐘(11), 樵歌(7), 琴瑟(2), 潮聲(2), 鷗鷺(1)		
煙・火 28(9.2)	群烟(13), 漁火(8), 續燈(4), 烽火(1), 火城(1), 燈道(1), 石塔(1), 錦帆(7), 酒店(1), 走犢(1), 漁蓬(1)		
動 物 28(8.6)	落雁(10), 鴈魚(6), 白鷗(3), 睡鴨(3), 放牛(2), 眠鷺(1), 睡鴨(1)		
人 13(4.3)	歸僧(3), 樵夫(3), 行人(2), 釣翁(1), 採女(1), 其他(3)		
その他 21(6.9)	鴈塚(2), 春耕(1), 秋詠(1), 晚歩(1), 遠眺(1), 納涼(4), 石塔(1), 錦帆(7), 酒店(1), 走犢(1), 漁蓬(1)		

Z: 月は秋月(5), 明月(4), 新月(3), 霽月(2), 望月(1), 邀月(1), 既月(1), 玩月(1), 湧月(1), 吐月(1), 望月(1), 梧月(1), 夜月(1), 涼月(1), その他(2)のようにあらわれるが, この中で最も多く表現された秋月にすべてを含めた。
 Y: 関連素材の総出現回数
 I: 群雲(2), 朝雲(2), 錦雲(2), 白雲(2), 宿雲(1), 飛雲(1), 舞雲(1), 閑雲(1), 晚雲(1), 晴雲(1)のような多様に景観が出現する境遇は群雲としてまとめた。

表－7 八景に関連している景観の季節別 時間帯別 区分

区 分	関 連 景 観
春	晚春, 早春, 春信, 春耕, 黄麥, 採女, 清風, 晴嵐, 活水, 清陰, 綠柳, 驟雨, 納涼,
夏	丹楓, 黃稻, 秋葉, 秋雨, 秋詠, 秋影, 秋雁, 晴雪, 密雪, 風雪, 雪山, 層氷, 寒松, 露脊,
秋	朝旭, 朝日, 朝陽, 朝暉, 朝露, 朝霧, 曉鐘,
冬	落照, 夕霞, 暮雲, 宿雲, 暮雨, 夕峰, 暮烟,
朝 暮	漁火, 續燈, 放牛, 睡鴨, 歸僧, 鴈塚, 錦帆,
四 時	

(ii) 八景対象地における景観分析

先ず, 八景対象地と関連して表現された景観の中で, 自然現象に関連する素材が多いことと素材が多様に表現されていることが特徴である。(表－6)・表－6は, 代表的な景観だけを選定して, 作成したが, 表の下に注記した月と雲についてみると, 自然景観が演出するかなり多様な景観を表現していることがわかる。このように, 多様な表現を行う際に, 春夏秋冬, 朝暮四時を考慮に入れて表現した点が重要といえる。こうした観点にたち, 表－6をもとに整理をおこなうと, 表－7のようになる。

このように, 自然景観の素材を朝暮四時にわたって多様に表現することによって, 訪問者たちに対して自然景観をみる詩的な眼目を提供し, 凡人らが通り過ぎやすい特定時期の特別な景観をも感じられるようにするのである。たとえば, 聞慶郡 白石亭の陰潭夜雨, 玉蓮亭の雪峰露背, 榮豊郡 天雲亭の斷橋人影, 君子亭の松嶺烟籠, 清道郡 先月亭の梅花續燈, そして, 潭陽郡 息影亭の白沙睡鴨などが実例としてあげられる。

また, 亭子に登った人々は, 八景の掛け札に書かれている自然景観の素材について, 朝暮四時にわたって多様である八景に関する文章をよみながら, 訪問した時点がその景観を楽しめる時期や時間帯ではなくとも, その景観がどうだったのか充分に想像して楽しむことができるようにしたと考えられる。このような時間に関することは, 景観処理技法に関する樓亭名の分析ではあらわれなかった事実といえる。

4. まとめ

本論文では古文獻の分析と現地踏査を通じ樓亭様式に現れた景観処理技法に関する特性を明らかにすることを目的にして, 朝鮮時代編纂された「新增東國輿地勝覽」, 「大東地志」, 「東國輿地備考」, 「増補文獻備考」を分析のための資料として使用し, 樓亭名に現れた景観処理技法を分析した。この結果を実証するために, 全国を対象として, 樓55個所と, 亭152個所等, 総数207個所の現地調査を行い分析した。その結果は, 次のようである。

1. 地理誌に表われた樓亭名を分析した結果, 景観処理技法に関する内容は, 聚景, 多景, 環景, 遠景, 挹(納)景そして虚の技法であった。これらは朝鮮時代の多数の文人たちが書いた記文を通じても立証でき, また実際の踏査を通じた立地類型別の景観構造, 古建築的な特徴や八景に関する分析でも立証できた。

2. クラスター分析の結果得られた立地類型を用いて, 景観構造分析を行った。景観構造分析は平均眺望距離, 平均眺望軸の数, 眺望軸線上の構成要素などを考慮した。その結果, 江辺断丘上, 曲江, 三江合流地などのような所に立地すると, 遠景, 聚景, 多景, 環景といった景観処理が可能となることが明らかになった。特に樓の場合, 曲江辺断岸丘上に立地すると, 視覚的範囲は平均選眺望距離が10.1kmにもなり, 「虚」の概念のもとに遠景という景観処理技法上の適用が可能となったことがよくわかる。

3. 古建築的な特徴の中で室の有無分析により, 多くの樓亭建築物は壁がなく, 外部景観を樓亭の中に引きこむ挹景が可能な建築的特徴を持っていることがわかった。

4. 八景対象地は主に樓亭で眺望する時, 視覚的限界と広いという印象を与える景観構成要素など(青山, 野, 村, 沙, 江)は, 樓亭に登る人々の閉鎖的で苦しい思いや感情を解き放ち, 涼しい感じを与えるという景観処理技法上の心理的效果を得る要素として判断された。また, 八景対象地で自然が演出する多様な景観を朝暮四時で楽しむようにした事実と, 視聴覚的なものまで納景するようにしたのは, 景観処理技法上のまたひとつ違った特徴を表わすものであった。

(1990. 9. 28仮受付, 1991. 7. 27受理)

- 注1) 八景というのは、樓亭の周辺、あるいは樓亭から離れているところにある青山、峰、嶺、村、野、江、塘、臺などを八景対象地と定め、この八景対象地であらわす景観である。
- 注2) 驪州牧、消心樓に関する薛文偶の詩…萬景森羅指點端 登臨不覺屢回顏
公州牧、聚遠樓に関する徐居正の記…樓之勝非一二而莫勝於聚遠 蓋遠取諸勝而聚之一樓也。
慶州府、倚風樓に関する李穀の詩…新羅古都壯觀迴眺幸於此樓。
延安都護府、聚遠樓に関する李穀の記…一道貴聚于按廉之身 一府之貴聚于太守之身 一邑之勝聚于斯樓 一樓之勝于此心
- 注3) 京都漢城府、漢江樓に関する記…倚檻縱觀 江山之勝俱在凡席
- 注4) 京都漢城府、楮子島に関する鄭麟趾の序…東自濟川亭西至喜雨數十里間 公候貴戚多置樓榭 以收攬風景
- 注5) 永川郡、明遠景に関する徐居正の記…四時朝暮光明瑩澈之氣 長在簾櫳凡席之中…
- 注6) 寧海都護府、西樓に関する權近の記…一目千里實擅一邑之形勝也…
- 注7) 徐居正の鶴鳴樓の記(1448)…每於公暇登臨 瞻眺導宣堙鬱…
申叔舟の靖遠樓の記…城有樓櫳之具然後可以備敵 邑有登眺之所後可以淨慮…

参 考 文 献

- 1) 安 啓 福 (1989): 樓閣および亭子様式を通する韓国伝統庭園の特性に関する研究, ソウル大学校博士学位論文, 24 - 43
- 2) 慮 思 慎 (1531): 新增東國輿地勝覽, 67, 127, 145, 285, 351, 356-357, 381-382, 389, 411, 413, 494, 552-553, 684, 704-705, 763, 836, 844, 952
- 3) 金 正 浩 (1864): 大東地志, 5-515
- 4) ? (高宗初): 東國輿地備考, 卷之一 7-35, 卷之二 37-39, 48-59
- 5) 朴容大 (1908): 增補文獻備考, 482-513
- 6) Abler, R., J.S. Adams and P.Gould (1971): Spatial organization. Prentice-Hall Inc., NJ, 60-61
- 7) Garrion, W.L (1958): Spatial structure of economy, Annals of the Association of American Geographers 49, 232-239. *Quoted from* Horton Frank E. and David R. Reynolds (1971): Effects of urban spatial structure on individual behavior, Economic geography 47 (1), 36-37
- 8) 徐居正 (1473): 東文選 (民族文化推進會, 国譯, 東文選, 景仁文化社), 616-617, 654-657
- 9) 李奎報 (1251): 東國李相國集 (民族文化推進會, 1978, 国譯 東國李相國集Ⅲ, 高麗書籍株式會社, 81-82.)
- 10) 安啓福 (1988): 慶北地方を中心で韓国の亭様式形成に及ぶ要因分析に関する研究, 曉星女子大学校研究論文集 37, 471-510

Summary : The style of “Lu Chong” was analyzed to investigate the characteristics of Korean traditional garden style or planning theories of garden. To carry out this study more effectively, a combined approach was introduced. This approach consisted of two processes. One was the review of old literature and the other was field survey.

About 65-80% of Lu•Chong were named after natural landscape elements or techniques of natural landscape treatment. The techniques were summarized “conversing-scape”, “surround-scape”, “multilandscape”, “far-off-scape”, and “emptiness of Lu•Chong or landscape”. The results were proved through the analysis of visual boundary, locational pattern and “Palkreong (eight-sceneries)”.